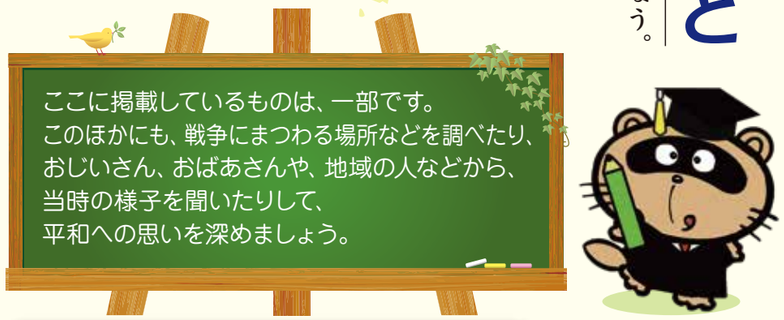
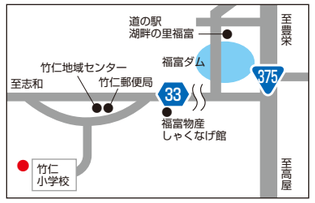
東広島市に残る戦争遺構など

身近に残る戦争の痕跡に触れて、当時の人々の気持ちを考えてみましょう。



① 友情の碑

1944 年から始まった疎開。福富地区では、1945 年に久芳、竹仁、上戸野の各国民学校で呉市からの疎開児童を受け入れたという記録が残っています。竹仁小学校（旧竹仁国民学校）の校庭には、疎開から60 年を記念して建てられた「友情の碑」があります。地元の子どもと疎開してきた子どもが終戦前後の半年間に培った友情は、今も生きています。



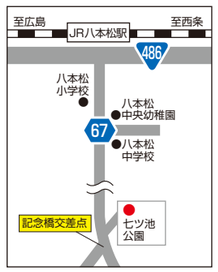
② 中野村聴音照射場（特設見張所）

太平洋戦争での米空軍機来襲に備え、日本各地に建設された聴音照射場の一つで、敵機などの監視をしていました。地元では「海軍山」と呼ばれています。水源が確保でき、海抜 514 メートルの高度から広島市や呉市への眺望が開けていたことから、この場所が選ばれたと考えられます。司令棟や燃料庫の建物は現存し、兵舎跡やトイレ跡、貯水槽跡などの遺構もあります。原爆投下当時の日誌には、広島市上空へ向かう B29 や、原爆が炸裂した時の様子が詳しく記されています。

③ 見送りの地

原村（現在の八本松町原地区）の若者が出征※1 するとき、近隣住民は記念橋まで歩いて見送りました。地域の女性で組織された国防婦人会や退役した軍人たち、小学校高学年の児童などが参列しました。50 人以上の住民が万歳三唱をし、軍歌を歌って見送っていました。七ツ池公園内にある現在の記念碑は、1998 年に、元々あった記念橋近くから移転した時に、新たに建立されたものです。

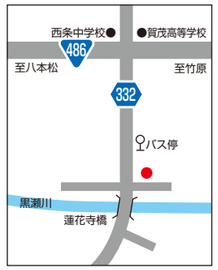
※1 兵士として戦地に行くこと。



④ 兵士壮行式場跡の碑

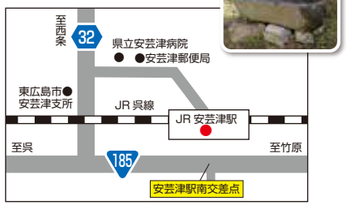
戦時中、召集令状※1 を受け取った若者は親元に帰り、付近の住民に見送られ出征して行きました。見送る住民は手に手に旗を持ち、出征者とともにこの地まで歩いてきたそうです。「万歳」「頑張れ」の声がこだまする中、戦争で弟を亡くした人が「死ぬなよ」とこっそり声を掛けてくれた、という体験者の証言が残っています。

※1 兵士として軍隊に呼び出すための命令書。



⑤ 帰国記念碑

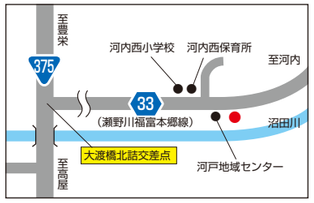
JR 安芸津駅の構内、ホームに向かう階段横に、松の記念樹とともに石碑が置かれています。彫られた言葉は「長間お世話に成りました　朝鮮人帰国者一同」。1943 年に安芸津町で建設が始まった造船工場では、作業人員の不足を補うため、工場稼働直後の 1944 年 9 月以降、数百人単位で学徒や朝鮮人徴用工を受け入れていたと考えられています。



⑨ 標柱（見送りの地）

河内町河戸の沼田川沿いにある 2 本の石柱。この場所は対岸の山の上にある群戸八幡神社の遥拝所※1 でした。また標柱は注連柱※2 として、戦時中に必勝祈願が行われていました。若者が出征するたびに住民が集い、河内駅まで歩いて見送ったそうです。戦死者の遺骨をお迎えする時も、皆で河内駅まで迎えに行ったとの証言が残っています。

※1 神社や寺などを、遠くから拝むための場所。
※2 神社などにけがれているものが入らないようにするための柱。



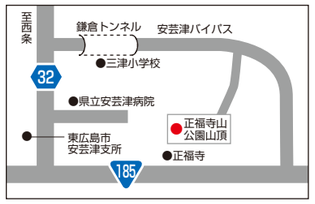
⑧ 板城村聴音探照所（特設見張所）

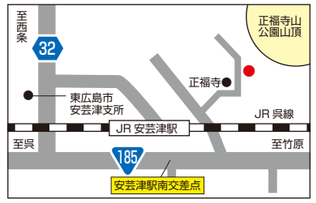
太平洋戦争中、敵の飛行機を大迫山で投影によって見つけ出すための、板城地区唯一の軍の施設でした。軍機密のため、詳しい資料が残っていません。広島に原爆が投下された 1945 年 8 月 6 日は「広島上空にて落下傘 3 個投下、7 倍稜鏡※1 の 1 分割位に変針中 B29、見えたる瞬間強烈なる閃光に驚けり」という報告が残っています。

※1 軍で使用していた双眼鏡の名称。

⑦ 防空監視哨跡の碑

日中戦争時、国内各地に設置された防空監視哨。三津町（現在の安芸津町三津地区）には 1937 年 8 月に設置命令が下されました。当初は役場に配置されましたが同年 11 月に正福寺山山頂に完成し、以後は民間防空の施設として使われました。16 歳から 55 歳までの警防団員を除く男子全員が敵機を監視する任務に当たりました。



⑥ 仏様の防空壕

正福寺医王殿の真裏にある防空壕は、仏様（薬師如来）のために造られました。「いざという時は、皆で仏様を守ろう」と、1945 年 5 月に信徒や漁業関係者が中心になって建築しました。れんがとコンクリートで造られ、扉は鉄製という頑丈なつくりでした。実際に仏様が防空壕に移されることはありませんでしたが、戦況が悪化した当時の様子がうかがえます。